

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21610012

研究課題名（和文）特性に応じた対話環境を重視した障害児支援

研究課題名（英文）Environmental factors that facilitate interaction of children with disabilities and their participation

研究代表者

高野美由紀（TAKANO MIYUKI）

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：70295666

研究成果の概要（和文）：

本研究では、障害のある子どもと支援者の対話に焦点を当て、特性に応じた適切な環境を、学際的に解明しようとした。対話環境を考える枠組みに ICF（国際生活機能分類）を用い、障害のある子どもの授業への参加を促す、ティーム・ティーチングにおける教師の態度などの分析を行った。その方法として、授業のビデオ録画情報をもとにマルチモダルな記述・分析を行い、児童の授業参加を促進する教師の態度を概念化した。

研究成果の概要（英文）：

This study aims to find out facilitative factors of interaction and participation of children with disabilities. Staffs' attitudes as environmental factors of the ICF model are interdisciplinarily investigated using multimodal descriptive and analytical methods and conceptualized.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：発達科学、小児科学、障害児医学

科研費の分科・細目：子ども学（子ども環境学）

キーワード：対話環境、オノマトペ、知的障害、発達障害

1. 研究開始当初の背景

遺伝子研究の進展により、発達における遺伝と環境の相互作用がクローズアップされ、環境の遺伝子発現への関与（エピジェネシス）が解明されてきている。これは、子どもの発達を支援していく上で、子どもを取り巻く環境を再考する機運が高まっていることも関連している。

ことばの発達と関連する環境要因として、テレビ・ビデオ視聴の影響も取り上げられているが、この背景要因として映像メディアからの一方的な働きかけによる弊害を指摘されており、対話を保障する環境の重要性を改めて認識するに至ったといえる。

一方、オノマトペ（擬音語・擬態語）を介在させる対話環境が、乳幼児との対話の促進

につながり、ことばの発達を促すという知見が集積されてきている。オノマトペはことばと意味のつながりが深く音象徴性があり、また2モーラの繰り返しが多くリズムカルな韻律を持つ。オノマトペの要素を含んだ育児語がよく用いられるが、オノマトペは乳幼児と共有がしやすく、乳幼児との対話に促進的に作用する。また、乳児の言語リズムの獲得や幼児の動作の習得にもオノマトペが関与するという研究が集積されてきている。本研究の代表者と分担者は、知的障害などの障害のある子どもとの対話促進や発達支援にもオノマトペが貢献できるのではないかと考え、これまで研究の中で障害のある子どもとの対話場面でのオノマトペについて分析を続けてきた。特別支援学校の授業において、教師発話に含まれるオノマトペを分析すると、授業の展開場面での注意喚起、児童の動作を応援促進、児童に対して理解しやすい説明解説など、オノマトペの教育上の効果が明らかになった。

しかしながら、障害のある子どもとの対話促進やそれらの子どもの発達支援を考える場合、オノマトペの使用だけでは当然ながら不十分である。オノマトペが、障害のある子どもとの対話促進や発達支援に有効であるという仮説の検証を今後も進めていきたいが、それだけでは、対話促進、発達支援にはつながらない。対話促進、発達支援という観点から、支援者の対話における態度などの対話環境をみていくことが必要になる。

この研究では、オノマトペのような発話表現が重要であるとしながらも、対話相手である支援者の態度など、対話促進や発達支援に肯定的に関与する対話環境を明らかにする。比喩的に言えば、オノマトペを「対話や発達を促進する遺伝子」とすれば、この研究では、その他の「促進の方向で関与する遺伝子」となる要因や、支援者の対話における態度などの、「対話や発達を促進する遺伝子の発現に関与する適切な環境」を明らかにしようとするものである。

障害のある子どもの発達支援につながる研究として、障害のある子どもと支援者の対話に焦点を当て、特性に応じた適切な環境を、学際的な観点から明らかにする。

2. 研究の目的

本研究は、障害のある子どもにとって、適切な対話環境とはどのようなものであるのかについて、学際的な観点からの分析を通して明らかにする。そしてさらに、それを基にして全人的な発達支援の手掛かりを得る。これらを目的として研究を進めた。

なお、対話促進・発達支援の視点から環境を考える枠組みは、ICF（国際生活機能分類 International Classification of

Functioning, Disability and Health）を用いた（図）。

活動と参加の「コミュニケーション」、「対人関係」（特に、複雑な対人関係、特別な対人関係）、「主な生活領域」（特に学校教育のサブカテゴリである、学校教育の履修）、環境要因の「支援と関係」（特に、知人・仲間・同僚・隣人・コミュニティの成員、権限を持つ立場にある人々）、「態度」（特に、知人・仲間・同僚・隣人・コミュニティの成員の態度、権限を持つ立場にある人々の態度）を中心に据えた。

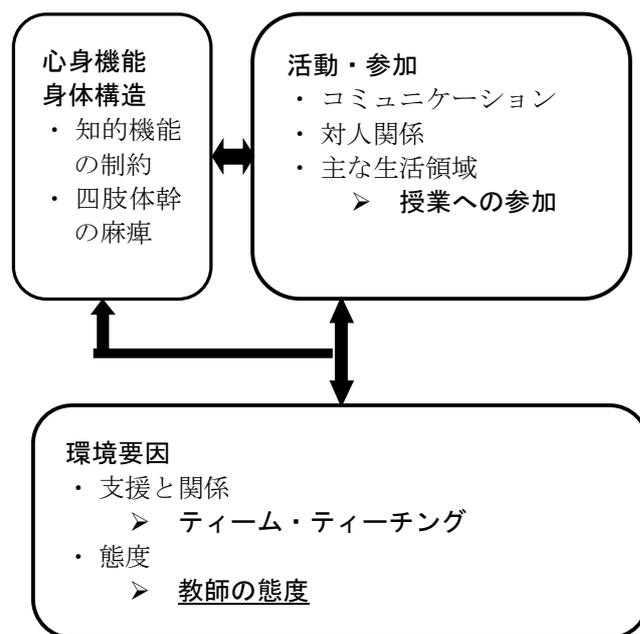


図. 対話環境を考える枠組み

3. 研究の方法

(1) 研究対象：知的障害および発達障害のある子どもと、その子ども達の支援者

(2) 手続き：普段の生活場面における障害のある子どもと支援者との対話エピソードを蓄積するために、フィールドでの観察および可能な範囲でのビデオ録画による資料の収集と、収集した資料の中からの分析対象の選出とを行った。

フィールドは、特別支援学校と大学における療育セッションで、新たに観察をする前には、研究の趣旨を口頭および紙面で説明し、ビデオ撮影が許可された時のみビデオ録画を行った。なお、支援者（主に教師になる）には、いつもと同じように子ども達に対応するよう依頼した。

それらの資料から障害児との対話促進・発達支援に関連する一定の定義に当てはまる意味あるまとまりをエピソードとして取り

出し分析した。

(3) 記述・分析方法：研究を通して記述・分析方法の確立を試行錯誤した。ビデオ収録した資料の音声情報をもとに書き起こし、トランスクリプションを作成した。そのトランスクリプションから定義付けしたエピソードを取り上げた。さらにエピソードの中で、詳細な分析・記述が必要なものについて、アノテーションソフト (ELAN)、描画ツール、音声分析ツール等を用いて、会話分析、ジェスチャー分析手法等を駆使し、記述・分析を行った。その記述・分析をもとに教師の態度等の概念化を行った。

4. 研究成果

(1) 記述・分析方法

詳細の分析が必要なエピソードについて、まず、トランスクリプションをもとに、会話分析の手法を援用して音声、ジェスチャー、視線などの情報を可能な範囲で盛り込んだ。特に音声言語での表出のない場面でも、その表出に対して発話されている、あるいは発話に応じるように表出されているなどの、対話として重要なジェスチャーや身体の動きなどは、発話はなくとも記述をした。この記述を読み返し、分析をしていくなかで、キープポイントと見なされる部分を以下の様にマルチモダルな記述を行った。

アノテーションソフト (ELAN) 上にビデオファイルを開き、複数の参加者の発話の書き込み、その音声分析、ジェスチャー等非言語的表現の書き込み、その他の付加的情報の書き込みを行った。

(2) 記述・分析結果

重複障害学級の授業における対話環境を考察するための記述・分析を行う出発点として、児童の「授業への参加」の促進因子として作用している「教師の態度」に注目した。

今までのところでは、関連する定義として、支援者である教師達が「チーム・ティーチングという関係で授業を行う際の教師間の対話」、対人関係での「反応の得られにくい児童との対話」、コミュニケーション上、「問題行動とみなしうる行動を用いて反応する児童との対話」の3つについて児童の「授業への参加」の促進因子となっているエピソードの分析を進めている。

・「チーム・ティーチングという関係で授業を行う際の教師間の対話」

主担当教師が会話を先導して教室内の対話を活発化する様子、オノマトペやジェスチャー、視線などマルチモダルな表現や補助教員の補完的説明などにより児童の理解を助ける工夫、児童の代弁、即座に「チームとして」肯定的な応答・評価を行う様子が明らかとなった。

・「反応の得られにくい児童との対話」

肢体不自由と知的障害の重複がありかつその障害が重度であるために、意思疎通が難しい児童と教師達との対話を分析した。教師は児童の姿勢や四肢の緊張の変化などを素早く察知し、心情を推測しながら共感し、模倣、発話、プロソディの変化、ジェスチャーなど多様な手がかりのあるマルチモダルな表現をしていた。教師がマルチモダルな表現を用いて「想像的な一人語り」(Stern, 1977)を行うことにより、児童に「交替の『かた』」(やまだ, 2010)を示す場面では、教師と児童との共鳴運動を捉える事もできた。また、教師が児童の模倣的な姿勢・動作をとることが、共感を意味するだけではなく、授業の文脈に児童を巻き込むことに貢献しているのではないかと、笑いやオノマトペには、緊張状態の緩和を行う役割があり、活動や参加のバリアを取り除くのに想像以上に重要なのではないかと、という仮説が生成された。

・「問題行動とみなしうる行動を用いて反応する児童との対話」

特別支援学校での専門性の高い教師や音楽療法士が執り行う授業の中での、教師達の支援方略のエピソードにキーワードをつけて概念化していった。

分析で明らかになった方略の一つに、「物を放る」、「体を前後に揺らす」というような授業から逸脱した行動と解されるものに対して、「次の児童に物をプレゼントする」、「草競馬の馬のまねをする」とやや過剰な肯定的解釈をある教師が提案して、その解釈を周囲の教師達が受け入れて対応し、その児童の行動を禁止する・叱責することなく、ユーモアも交えて授業の文脈に沿った楽しい活動を作り、児童を積極的な参加者として位置付ける、というものがあつた。そして、これらの専門性の高い教師達の支援方略は、児童の自尊感情を育て、主体的な活動形成、将来的には適切な参加行動を形成するのに貢献するのではないかと見えてきた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

①高野美由紀、有働真理子、特別支援学校における教師と児童のインタラクションー重複障害学級における児童の反応に応じる教師発話・表現の分析ー、兵庫教育大学研究紀要、査読無、第39巻、2011、pp.59-66、

②高野美由紀、有働真理子、養護学校の教師発話に含まれるオノマトペの教育的効果、特殊教育学研究、査読有、第48巻、2010、pp.75-84、

③高野美由紀、有働真理子、特別支援学校の

ティーム・ティーチングにみられるインター
ラクション、兵庫教育大学研究紀要、査読無、
第 36 巻、2010、pp.53-60、

〔学会発表〕(計 13 件)

- ①高野美由紀、有働眞理子、特別支援学校の
教師が用いるオノマトペ表現—教育実践の
分析による表現効果の概念化—、日本発達心
理学会第 23 回大会、2012 年 3 月 10 日、名
古屋、
- ②有働眞理子、高野美由紀、特別支援学校の
教師のオノマトペ表現 (1) —知的障害児の
授業参加を促す発話行為の身体性—、日本発
達心理学会第 23 回大会、2012 年 3 月 10 日、
名古屋、
- ③ Miyuki Takano, Mariko Udo, On
Teacher's Responses to Fine Motions of a
Pupil with Profound Intellectual and
Multiple Disabilities, The first
Asia-Pacific regional roundtable on
Profound Intellectual and Multiple
Disabilities (PIMD), 2011 年 10 月 20 日,
京都、
- ④高野美由紀、有働眞理子、特別支援学校の
重複障害学級における複数教師と児童のイ
ンタラクション—教師達の支援方略の概念
化をめざしたマルチモーダルな記述・分析
—、第 28 回社会言語科学会研究大会、2011
年 9 月 17 日、京都、
- ⑤高野美由紀、教師のオノマトペ、ほんわか
してハッとひらめく研究会、2011 年 2 月 19
日、神戸、
- ⑥高野美由紀、オノマトペ的表現を含んだや
りとり、ほんわかしてハッとひらめく研究会、
2011 年 2 月 19 日、神戸、
- ⑦有働眞理子、ミニレクチャー「オノマトペ
とは何か」、ほんわかしてハッとひらめく研
究会、2011 年 2 月 19 日、神戸、
- ⑧有働眞理子、オノマトペの身体性、ほんわ
かしてハッとひらめく研究会、2011 年 2 月
19 日、神戸、
- ⑨ Miyuki Takano, Mariko Udo, The
Communicative and Educational Effects of
Onomatopoeia in Teachers' Utterances at
Special Schools, 3rd conference of
IASSID-Europe, 2010 年 10 月 22 日, ロ
ーマ,
- ⑩高野美由紀、有働眞理子、特別支援学校に
おける教師と児童のインターラクション—
重度・重複障害児の反応に言及する教師発
話・表現の分析—、日本特殊教育学会第 48
回大会、2010 年 9 月 20 日、長崎、
- ⑪高野美由紀、有働眞理子、特別支援学校の
ティーム・ティーチングにみられるインター
ラクション (2) —重度重複児の授業参加を
促進する対話の構造—、日本発達心理学会第
21 回大会、2010 年 3 月 26 日、神戸、

- ⑫有働眞理子、高野美由紀、オノマトペ表現
の韻律がもたらす共振と共感—知的障害児
の対話活性化に向けて—、日本発達心理学会
第 21 回大会、2010 年 3 月 26 日、神戸、
- ⑬高野美由紀、大川まみ、有働眞理子、特別
支援学校のティーム・ティーチングにみられ
るインターラクション—児童の主体的参加
を促進するという観点からの分析—、日本特
殊教育学会第 47 回大会、2009 年 9 月 19 日、
宇都宮、

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.hyogo-u.ac.jp/mmurata/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高野 美由紀 (TAKANO MIYUKI)

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：70295666

(2) 研究分担者

有働 眞理子 (UDO MARIKO)

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：40183751